

美!



東京醫科大學
皮膚科醫局
笹岡 芳名

美と申す範圍はなかく、廣い最も低級なる脚色美もあれば最も崇高なる精神美もあり、故に美と云ふ丈けを述べても一月や二月で盡さるものではありませぬ、此事は皆々方の御承知の通りであります、私の今申しますのは、月の美、花の美、衣服の美、毛髪之美即ち形容の美それに精神の美的觀念が、如何に人目を喜ばしめ慰安を與へ延いては一種の精神的療法ともなる様に思はれますので、その事をお話致し度いのであります、皆さんも御承知で有りませしやう故人となつた高山樗牛博士は古今東西幾多の人が感に打たる、所の蒼白き月の光り（月色美）を説いて極めて綿密に世人に了解せしめた人で有りますが、美的觀念を以て事物に接すればまだ、多くの見捨てられたる美も存在するのであります、宮城野やよし野の

里に小さく咲ける葦の花が得も云はれぬゆかしき美なると共に枯野原の一すじ道にちらばる馬糞がそれも見様によりては美化せしめ得るものであります、大徳が腰をかいて嵯峨野に糞をひる處や、上野、芝などの公園に茶屋女がまめやかに働いて赤い腰巻が春風にちらちらする處や、水晶も欺くような大きな風呂の湯壺の中に玉と砕けん眞裸體の人が浴みするも電燈に透し見るなどは随分美しい感じがするもので有ります、是は糞腰巻、裸體の男などが一つ一つに美なるものではありませぬが、時と場合によりまして美化し得るものの證據であります、俗間にも物は見様に依ると申します、が誠に其通りであります、私は今少しく誰も知る櫻の花に就いて古來一種の感に打たれて作つた詩歌を申し上げませしやう

百人一首にも戴つてゐます通り伊勢大輔がはじめて宮中に上りました時に、さる者が櫻花一枝を献上しました、恰も帝のお側に附いて居つた藤原道長が筆硯を興へて和歌を題せしめましたが御承知の

いにしへの奈良の都の八重櫻今日九重に匂ひぬる哉

と、すら／＼書きました、その筆の痕は今も人口

に傳はつてゐる通りであります、又源三位頼政が仁平三年四月襟裡に怪鳥(鶴)を射

て主上の御惱みを癒し参らせし事は誰も御存じの通りでありますが此の人も亦和歌を能くしまし

た、その櫻を詠んだうちに、次の如きめで度き歌が

近江路や眞野の濱邊に駒とめてひらの高嶺の花

を見る哉

又源將軍が智勇絶倫なる事は誰も知つての通りで有りませんが、奥州に赴く時勿來關を過ぎ、偶々

櫻花の散りしきるを見て

吹く風を勿來關と思へども道もせに散る山櫻花

と詠み変した、又薩摩守忠度が六彌太に首を取ら

れし時、旅宿の花といふ歌一首を箆に結ひつけて

ありました、その歌

ゆきくれて木の下蔭を宿とせば花や今宵の主なるらめ

又遠江國熊野女が曾て都に召されて、大臣宗盛に寵せられました時に

いかにせん都の春も惜しけれど馴れし吾妻の花

や散るらん

と感慨を歌ひました、此の他本居官長翁が大和魂

を櫻花になぞらへて

敷島の心和人をとはい朝日に匂ふ山櫻花

とて幾萬年我帝國の有らん限りもてはやされる歌

であります、またこの他に詩人竹外の芳野の櫻花

を詠じて

古陵松柏吼三天隱。山寺尋春春寂寥。眉雪老僧

時停筆。落花深處說三南朝。

と歌ひました、芳野の詩が出ました序に今一つ私の

最も敬服して居る詩聖梁川星巖の芳野の花に對

する吟咏を御紹介しましやう

今來古住事茫茫。石鳥無聲杯土荒。春人櫻

花 滿山白。南朝天子御魂香。

以上の詩歌は僅かに今私の念頭に覺えてゐるもので

有りませんが、古書などを採獵つて見ますと數へ

れば作れませぬが、作れぬまでも古人の云ひ残した詩歌を味ふ力や、月花に對してうつとり酒にでも酔ひし様な心地がするとまで觀得れば、おな勝ち作れぬとも良いので有ります、それ故に是非多少の修養を積むのが自分の一の樂みでもあり、遂に作り得るに至れば武きもの、夫の心をも和げ得るものであります、何と高尚なる美では有りませんか、女性の詩人としては先きに述べました星巖の室が紅蘭女史と云ふて有名であります、歌を能くする人は現在にも與謝野晶子、久保より江女史の如きがあります

話が代はりますますが衣服なども新柄く流行するようであり升が、いかにも其通りで物には變化が無くては直ちに飽くもので有ります、庭の小さき池も鉢の水も久しく換へませぬと泥むで有りますやう、時代で申すならば徳川が三百年の太平も餘りに久しかりしとは云へ、遂に光明ある維新に大變化したでは有りませんか、此變化の賜で有る今日の世の中は四十一年前には、夢にも思はれなだだろうと思ひます、私は何物に依らず變化が無

ければ物が進まぬので常に變化が無くては駄目だと考へます、衣服の新柄と申すのも全く此の例に洩れませぬ、依て出来る丈け品良き柄を作り衛生的に織り成されたるもので、男女考幼に適ふ所の目覺しきものは作製して欲しいと考へます、徒らに變形男子の如く女子の服装を改良するのは、熟考すべき問題で、元祿、平安朝などの衣裳が今日世人の推獎する衣服で有ると共に我國固有の古雅艷容なる國粹は保存すべきが至當であらうと思ふ

毛髮、形容の美も頗る人目を喜ばしむるもので有ります、黄金色を欺くが如き金髮、滴らんが如き黒髮の文金烏田、何れ劣らぬ美麗なるもので有ります衛生學上より見ても常に毛髮を梳り、時々沐浴して身體の垢を落すなどは嬉しきもの、一で有ります我々皮膚病學を修むる者は、とりわけ皮膚の血色光澤などを美麗にし、身體の何れにも存する汗線の分泌障害なきやう、さては發疹物の出來ないやうにと計らなければなりません、彼の色素性乾皮症(俗にぞばかす)が遂には腫物の最も悪性で有る所の癌腫の肉腫を誘發するなどに思ひ

至らば、徒らに性も知れないかし、ろいなどを壁の如く塗つて美貌を計り、又猥りに油類を塗布して頭髪之光澤を計るよりも、人生天然の皮膚の美を計り毛髪之美を計るといふのが生理的に本能を全うする道であらうと思ひます、玉川の水に晒らせし雪の肌といふのも出来ない事では無いので有り
ます
斯様に大略を述べて見ますと、餘程贅澤で餘裕の有る者でなければ出来ぬといふ感があるかも知れませぬが、決してそうではない、此婦人衛生會々員諸姉が中流以上の歴々の御方々で有れば是敷の事は何でも無い、いや却て日常に實行されて居る事だろうと思ひます、先きに歌の事を申しましたが、古へは殆んど歌は雲の上人の専有物で有つたやうな観がありましたが、三十一文字よりも短詩形である俳句は平民的に大流行がしたものであります、諸姉が或は諸姉の家族知己等が、不幸にもいたつきに有らせらるゝ時、歌俳句などを以て己れを慰め人を安せしめ得るならば、私は最も崇高なる人格として推奨するのであります、古來女流

俳人が世に傑出し是等の女流が多くは中流以下に、しかも遊女の如きものに在りしとすれば、今日十七字詩たる俳句が最も廣く上下を通じて流行する時代に於て一人の女流作者の傑出するもの亦甚だ愉快であらうと思ひます
井の端の櫻あぶなし酒の酔
君は今駒形あたりほとゝぎす
鍋炭の流れ耻づかし燕子花
風は風雪には雪の柳かな
奥底の知れぬ寒さや海の音
いかに是等の俳句が女子の性格を表はして一種の感に打たるゝでは有りませぬか
ことに婦人が優艶なる容貌を以て内に在りては夫に見えて其日の心勞を喜ばしめ、外に在りては社交上まめやかに處するといふ事になれば生涯を通じて最も愉快に美の享樂を得るであらふと思ひます、とりも直さず最も高尚なる婦人本能の性格を完うするに一致するであらうと思ひます

秋色
高尾
千代
そ
川